

研究代表者氏名	中 島 祥 好			研究組織	6 人	
所属機関・部局・職	九州芸術工科大学・芸術工学部・教授			所属機関所在地	福岡市	
研究課題名	聴覚の文法：言語と非言語とを包括する体制化の研究					
研究の概要等	<p>聴覚体制化は、「音の始まり」、「音の終わり」、「継続部」、「空白」の「音要素」がどのように連結されるのかを定める簡単な文法に支配されており、その結果として聴覚における知覚内容の基本単位である「音事象」、「音脈」を生じていると考えられる。この聴覚の文法が、さまざまな言語における音韻体系の普遍的な枠組みになっているのではないかとというのが、本研究計画の基礎となる仮説である。スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールは、いかなる音韻体系であれ我々の聴覚に根ざすものであることを明らかにしており、本研究計画にもその思想を導入することを試みたい。ド・ソシュールが、「音節」と名付ける概念は、我々が「音事象」と名付ける概念に極めて近く、その著書には、我々が解明しようとする聴覚の文法を、概略的に捉えていると考えられる一章がある。聴覚体制化の原理と、音韻、言語における文法とのあいだに、対応関係を見出すことが、我々の究極の目的である。</p> <p>聴覚の文法がどのようなものであるかを調べるために、ここでは「空隙転移錯覚」という聴覚における錯覚現象を取りあげる。これは、本研究計画に参加している中島祥好と佐々木隆之とが、1993 年に報告した現象である。例えば、中央に 100 ms の時間的空隙を持つ 2500 ms の上昇グライド音と、空隙をもたない 500 ms の下降グライド音とが、それぞれの中央において交わるとき、物理的に途切れているのは長いグライド音であるにもかかわらず、多くの場合、短いグライド音のほうが途切れているように知覚される。この刺激パターンを時間的に逆転させた場合にも、同様の錯覚現象が生ずる。このように、時間的空隙が音から音へとのみ移るような錯覚現象がなぜ生ずるのかに関して、我々は、ある音の始まりと、別の音の終わりとが、この順に、時間、周波数の上で近接して生ずるとき、知覚の上で結びつくことがあるのではないかと考え、聴覚の文法の着想を得た。そして、現在、このような刺激パターンの変種として、音声に関連付けられるような刺激パターンを作成し、時間的空隙の検出が、閉鎖音の知覚にどのように関係するかを調べようと考えている。特に知りたいのは、さまざまな子音が知覚される際にみられる体制化の原理が、音声コミュニケーションに関する音韻上の制約条件に反映されているのかどうか、という点である。</p>					
当該研究課題と関連の深い論文・著書（研究代表者のみ）	<p>Nakajima, Y., Sasaki, T., Kanafuka, K., et al. (2000). Illusory recouplings of onsets and terminations of glide tone components. <i>Perception &amp; Psychophysics</i>, 62, 1413-1425.</p> <p>Sasaki, T., Suetomi, D., Nakajima, Y., and ten Hoopen, G. (in press). Time-shrinking, its propagation, and Gestalt principles. <i>Perception &amp; Psychophysics</i>.</p>					
研究期間	平成 14 年度～ 18 年度（5 年間）					
研究経費	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	合計
（15 年度以降は内約額）	千円 40,000	千円 5,900	千円 10,300	千円 5,900	千円 8,300	千円 70,400
ホームページアドレス	<a href="http://www.kyushu-id.ac.jp/~ynhome/index.html">http://www.kyushu-id.ac.jp/~ynhome/index.html</a>					